
ココロのゆくえ

向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロのゆくえ

【Nコード】

N8115V

【作者名】

向日葵

【あらすじ】

夏真つ盛り。楽しみにしていた臨海学校で、アタシを悩ませたアタシのココロのゆくえ。

自サイトにて既に公開済みの作品です（2009/07/25）

第1話

なによっ、シンジったらあんなにデレデレしちゃって。
あの女も、あの女よっ。ちよっと人気あるからって、いい気にな
って。

「よろしくね」

「こちらこそ、よろしく」

顔赤くしちゃってさ。

「ごめんね、アスカ！」

いいわよ。ヒカリがそんな風に手を合わせて謝ってくれなくたっ
て。

アタシは別にシンジとペアになりたかったわけじゃないもの。

「クジ引きに細工したはずだったんだけど、どっかで手違いがあっ
たみたいで、アスカが引くはずだったクジを……おまけにアスカが
あれを引くなんて……」

だから、別にいいんだってば！

アタシは相手がシンジじゃなかったって全然構わないの！

ただの肝試しじゃない。ここを一周するだけでしょ。そんなの誰
が相手だって、関係ないわ。

だけど……ペアは男女って、誰が決めたのよ？

学校の伝統行事だかなんだか知らないけど、なんでわざわざペアを決めて肝試しするのよ？ そんなの一人で回ればいいじゃない。たかが肝試しよ。肝試し。ペアである必要がどこにあるって言うのよ？

どうせ女子が「きゃ〜っ」とか「こわい〜」とか言ってるのを、バカな男子が可愛いと思うっちゃったりするんでしょ。ふんっ、くだらない。アタシには関係ないことだわ。

だって、そうでしょ。仕方ないじゃないっ。アタシには全然関係ないのよ。

アタシって昔からクジ運悪いんだから。こんなことになるんだったら、初詣で大吉なんて引くんじゃなかった。あんなところで運を無駄に使ってさ。

みんな勝手に楽しくやってればいいじゃない。だって、アタシには関係ないんだもの。

アタシは、アタシは……アタシはお化け役なんだからっ！！

真っ青な空の下、アタシたちを乗せた大型バスは、一路海を目指していた。

今日から3日間、第三新東京市立第壱中学校第2学年恒例の臨海学校が行われるのだ。

3年生の修学旅行以外では唯一の泊りがけの行事。学生の期待も半端ではない。

その理由は、日ごろは縁遠い海の近くで開放的な気分になれるということ、そして初めてクラスメートと共に夜を過ごすということ。何よりも多くの学生が楽しみにしているのは、最終夜に行われる「肝試し大会」。嘘か本当か、毎年この「肝試し大会」をきっかりに、多くのカップルが誕生するのだという。

恐怖体験は他人との親密さをより深くするっていうし、あながちな話ではないわよね。

もちろん今年の学生たちも、それを一番の目的としてるみたいで。

「ねえ、ねえ、ヒカリ。ヒカリはどうするの？ もちろん鈴原に告白するんでしょう？」

例に漏れず舞い上がっていたアタシは、隣の席で窓の外を眺めているヒカリの脇腹をコツコツと肘で突付いた。

「えっ、そ、そんなことしないわよ。だって鈴原、私のことなんてなんとも思っていないと思うし……」

突然の質問に顔を赤らめて、ヒカリは慌てて首を振る。

「なあに言ってるのよ。鈴原だってヒカリのこと好きに決まってるじゃない。じゃなきゃ、あんなにヒカリのことばかり見てないわよ。ほらっ」

そう言って、アタシは座席から通路に首を出して、車内後方を振り向く。

一番後ろの席に並んで座っている3バカトリオのうちの一人と目が合ったので、お互いに軽く手を振ってからヒカリに向き直った。

「ほらごらんさい。やっぱり鈴原のやつ、こっちはかり見てたわよ。ヒカリが気になってるのよ」

「それはアスカが顔を出すからでしょ。そんなの誰だって気になるわよ!」

そんなのアタシだってわかってる。でもこの二人がお互い好きあつてるとするのは、間違いない。

それなのにヒカリも鈴原も煮え切らない態度をとってるから、アタシが誘導してあげてるのだ。

まあ、簡単に言うとお節介ってやつ? こういうのって、きつかけが必要だと思っし。

ほら、誰かがチョンと背中を押しただけでトントんと物事が進むってことあるでしょ。

「それより、アスカはどうなのよ?」

「へっ? アタシ?」

「そうよ。アスカの方こそ、碓君に告白しないの?」

「な、な、な、何言ってるのよ、ヒカリ!」

「だって、好きなんですよ。碓君のこと」

「ぜ、全然好きじゃないわよつ、あんなやつ!」

「とてもそんな風には見えないけど。いつもすごく仲がいいじゃない。今だって手を振ったりして。」

鈴原を見たって言うておきながら、本当は碇君を見たかったんじゃないの？」

ヒカリはクスクス笑いながら、アタシの顔を覗き込んだ。

それは真実ではないと思いつつも、言い返せないのはなぜだろう。

ヒカリのいう「碇君」というのは、さっきアタシが手を振った3バカトリオのうちの一人だ。名前を「碇シンジ」と言つて、うちの隣に住んでるアタシの幼馴染。

いつも鈴原と相田の3人でバカなことばかりやってるから、3バカトリオ。もちろん命名者はアタシだ。

ヒカリは、アタシがそのシンジのことを好きなのだとつて憚らない。

確かに子供の頃からずっと一緒だったアタシとシンジの仲が良いというのは、自他とも認めるところ。

でも好きとか嫌いとかそういうことを考えたこともないし、シンジの口からも、そんな話を聞いたことはない。

一緒にいると楽しいし、居心地もよい。だけど、ドキドキするとか相手を思つて物思いに耽るとか、そういうことは一切なくて。

上手く説明できないんだけど、つまりはそういう関係。

「委員長特権で、アスカと碇君がペアになれるように、くじ引きに細工しておくからね」

「そういうの特権で言わないわよ。職権乱用よ」

とても楽しそうにニヤニヤしているヒカ리를軽く睨みつつも、少しだけ期待してしまうのはなぜだろう。

アタシはヒカ리의向こう側にある窓の外に目を向けて、キラキラと海面に反射する太陽の光に思わず目を細めた。

臨海学校は、海岸と目と鼻の先にあった。そのためグラウンドやテニスコート等を含めたすべての敷地を囲むように、防風林である松がびっしりと植えられている。

そうは言っても、その松の囲いの内側はかなりの広さを有しているようで、防風林の圧迫感というのは、全くと言っていい程無い。建物においても、中学生が宿泊し学習する場としては、十分なくらいの外観と設備を備えていた。もっとも、近くに寄れば海の潮風による錆があちこちに見て取れるのだけでも。

部屋割りは男子が2階、女子が3階。全部屋4人ずつに分けられた。

窓を開ければ、眩しい陽の光と潮の香り。青春の大切な数日を過ごす場所としては、悪くない。

着いて早々、荷物の整理も終わらないうちに、アタシたち学生は学習室と呼ばれる机と椅子そして大きなホワイトボードしかない、

ひどく簡潔な場所に集められた。

臨海学校というからには遊びで来ているわけではないのだけれども、あまりにも質素な空間になんかガツクリきて、アタシは思わずスンツ鼻を鳴らした。

大事なことを忘れるところだったけど、今回の臨海学校にも一応学習目標というのがある。

「地域の歴史とそれに纏わる仏閣神社及びその他歴史的建造物について」

「地域住民の海との関わり、海の恩恵と塩害について」
「地域一帯の地盤・地層及び気候・天候について」

等々いくつかある課題の中からグループごとに決定・調査し、その成果を発表しなければならない。

臨海学校は3日間だが、最終日の午前中に研究発表会があるため、実質は今日の午後と明日の、合わせて一日半。

どう考えても付け焼刃な研究だと言わざるを得ないが、臨海学校としてはこんなものだろう。オリエンテリングよろしく、足と耳を使つての情報収集を行うことが目標なのだから。

早速グループごとに分かれて、情報収集へと向かう。

知らない町を地図を片手に歩くというのは、ちょっとした冒険の様だ。みんな浮かれ気分で、町を歩き回る。

欲を言えば、日差しがもう少し弱い季節に訪れたかった。今日の太陽は肌に突き刺さるようで、乙女の大敵に他ならない。

研究班のグループ分けは単純に名前の順に前から4班に割り振られた。臨海学校という名目上、一応学習の場。部屋割りとその研究班割りには先生の一存で決められた。

偶然と言っかなんと言っか、私はシンジと同じ班だ。ま、気心知れててやりやすいかな。

ヒカリは残念ながら別のグループ。

何より残念に思うのは、ヒカリと鈴原が別々のグループになってしまったということ。これで二人の関係の進展は、肝試しまで預けか。

大きなお世話だと言われればそれまでなのだが、大好きなヒカリには幸せになって欲しいのだ。

そんなことを考えていたアタシに、ヒカリが駆け寄る。

「アスカ、良かったわね。碓君と同じグループじゃない。頑張るのよ」

「頑張るって何をよ？」

「碓君を狙ってる女子って、けっこう多いのよ。ほら、同じ班になった間宮さん、碓君のことを気に入っているって噂よ。

しっかり見張ってないと、間宮さんに碓君を取られちゃうかもしれないわよ？」

「と、取られちゃうも何もアタシとシンジは……」

「いい、アスカ？　いつまでも意地張っていると、本当に碓君を誰かに取られちゃうかもしれないのよ」

「だから、別にアタシはシンジのことなんて何とも……」

「とにかく、頑張るの！ 間宮さんになんか負けちゃだめだからね」

アタシの顔を思いっきり覗き込んで力強く語ったヒカリは、メンバーに呼ばれて、慌てて後を追いかけた。

第2話

頑張れと言われてもねえ。

間宮さんがシンジに気があるとは初耳だ。

でも、確かに……そういえば、さっきから間宮さんはシンジにぴったりとくつついて歩いている。シンジの広げた地図を覗き込んで

ちよつと、ちよつと、それは必要以上にくつつき過ぎ！ シンジのお人よしっ。鈍感男っ。間宮さんの魂胆も知らないで、ニコニコしちゃって。もう少し離れろっ！

……って、アタシ何言っちゃってんのよ。別にシンジの傍に誰がいようと関係ない。

アタシはグループの最後尾について、のそのそと歩いた。

前方の二人をなんとなく目の端に捕らえながらボーっと歩いていたらアタシは、突然日差しが遮られて陰になったことに驚いた。

ハッと陰を振り向くと、そこにはアタシに覆いかぶさるようになっている立っている笹本の姿がある。長身の彼がそこに立つことによって、アタシが彼の日陰に入る格好になったのだ。

「なんだよ、惣流。ボーっとしてさ」

アタシは彼の顔を見上げると、

「別に」

実に素っ気無く返事をした。

だってコイツ、しつこいんだもの。なんでこんなやつと同じグループになっちゃったのかしら。

この笹本って男、長身でスポーツが得意とかで、クラスの女子からはけっこう人気がある。

でもお生憎様。アタシは全然興味がない。

自分の人気があることを鼻にかけていて感じ悪いのよね。

にもかかわらず、彼はアタシに首っ丈。これは自惚れでも何でもなく、周知の事実。

はつきりと断ったにもかかわらず、めげずに何度もアタシに挑んでくる。

以前、あまりにもしつこい笹本の追っかけに頭にきて、アタシは尋ねた。「何でアタシなのよ？」って。

そしたらアイツ、なんて言っただと思う？

「青い瞳の彼女がいたらカッコいいじゃん」

ふざけんなっ！！

皆さんのご想像通り、アタシの怒りは頂点に達したわけで。彼の顔めがけて鞆が振り下ろされたのは言う間でもない。

そんなこんなでアタシはこの笹本が大っ嫌いなのだ。

それなのに笹本はアタシの周りをウロウロウロウロ。そして間宮さんもシンジの周りをウロウロウロウロ。

期待を膨らませていたはずの臨海学校は、最悪な形で幕を明けた。

2日目の朝、クラスの女子の多くは半分眠ったままの頭で朝食を採る羽目になった。海辺の美しい朝日を眺める余裕なんて、こればつちもなく……

おしゃべり好きというのは、女子の宿命だろうか。昨夜は遅くまで、人によつては明け方まで、おしゃべりに花を咲かせていた。女子中学生が話すことと言えば、内容のほとんどはもちろん恋の話し。みんなで感嘆詞を多用しながら、充実した時間を過ごしたのだ。

「洞木さんはやっぱり鈴原なの？」

「えっ、そんなこと……」

誰かが当然のことだと言う様に、声を上げた。クラスの女子の視線が自分に集中したのを感じて、ヒカリは真っ赤になって俯く。

「まだ告白してなかったの!？」

別の方向から、また別の驚きの声が上がる。
みんなも思ってたのね。ヒカリと鈴原はくつつくべきだって。
自分の目に狂いはなかったと、アタシはひとりほくそえんだ。

「ねえ、あなたは？」

「早く言っちゃいなさいよ」

そんな風に一人ずつ白状させられていく。

頑なに発言を拒否する者もいれば、自ら声を大にして発表する者もいて、面白い。

アタシはもちろん、こう答えた。

「特になし」

「ええええっ~~~~~!!」

そんな非難の声が上がったが、本当のことだから仕方がない。今のアタシには、胸が苦しくなったりドキドキするような相手がいないのだから。

シンジはどんなだとアタシに詰め寄った人もいたけど、シンジにそういう感情はないとキツパリと言ってやった。

そうしたら近くに座っていた間宮さん、

「じゃ、私が碇くん、狙っちゃおうかなあ」

アタシにだけ聞こえるようにそう言って、意味ありげな視線をアタシに寄こした。

狙っちゃおうかな？ もう狙ってんじゃない、アンタ。

何でわざわざアタシに言うのよ？ 宣戦布告ってわけ？ 別にア

タシはそれに乗っかるほど暇じゃないけどね。

アタシはわざと聞こえない振りをした。だって、アタシには関係ないもの。

……でも、なんか……ムカつく。

朝食を終えたアタシたちは、のんびりする間もなく玄関前に集合した。

今日の予定はこうだ。

午前中は昨日と同様、足を使つての情報収集。そして昼食の後、しばし自由時間。海へ行くもよし、散歩に行くもよし、もちろん部屋でダラダラするもよし。

そして夕方からは、集めてきた情報を基にした研究のまとめを行うことになっている。

午前中さえ乗り切れば、青い海がアタシたちを待っている。今日のためにとびつき可愛い水着を買ってきたんだから。シンジのため息が聞こえるようだわ。

……って、だから、シンジの感想はどうでもいいのよ。

とにかく、逸る気持ちを抑えつつ、アタシは玄関へ向かった。

今日はまた一段と暑い。外に一步出ただけで、一瞬目がくらむ。思わずフラツとなりかけた身体をなんとか立て直すと、目を細めて辺りを見回した。

「今日はどっちの方へ行ってみる？」

「適当でいいよ。目ぼしい場所は昨日だいたい行っちゃったし」

地図を広げて輪になって、みんなが相談している声が聞こえるが、アタシはその輪に加わらずに、少し離れた場所で空を見上げていた。

暑いわね。まったく。

「昨日とは反対側へ行ってみたらどうか？」

「うん。私もいいと思う。碇君が言うならどこでもいい！」

顔を見なくても想像できることに腹が立つ。語尾にハートマークが付いてるんじゃないかと思うほど甘えた声で返事をしているのは、間違いない。間宮さんだ。

なんなのよ。あの女。

暑くてみんなの話しも耳に入らない。こうしてここに立っているだけで、なんだか眩暈がする。

今のバカバカしい発言を聞いたせいだろうか。

「じゃあ……」

こつも暑いと、何もなくても体力を消耗する。何でもいいから早く決めて欲しい。さっさと出発して、さっさと帰ってきて、アタシは早く海へ行きたい。

海で遊ぶことが、この臨海学校でのいちばんの楽しみだったのだから。

だって……かわいい水着……買ったし。

「アスカ、行くよっ」

アタシがボーっとしている間に、みんながポツポツと歩きはじめていた。シンジの呼び声に、アタシもようやくみんなの後を追う。

セミがうるさい。

このセミの鳴き声が、体感温度をグッと押し上げる。

宿舎を出発してまだ5分も経っていないと思うのだが、昨日よりもこの日差しによるダメージが断然大きくなっている気がする。チリチリと音が聞こえそうなほどに、太陽は肌を傷つける。

日差しが強すぎるのだろうか。視界に靄がかかったように、白っぽく見える。

相変わらずシンジの隣りには、間宮さんがぴったりとくっついて歩いて。シンジも満更でもないような顔しちゃって。

もっと迷惑そうな顔、しなさいよ。いくらお人好しだからって。いくら鈍感だからって。

……バカ。

そしてアタシの隣りには、やっぱりしつこく笹本が張り付いている。こんなに迷惑そうな顔してるのに、どこまで樂觀的なのかしら。さっきから自慢話ばかり。もう聞き飽きた。

ときどきシンジがこちらを振り返る。心配そうな顔をして。

大丈夫よ。迷子なんかにならないから。ちゃんとみんなの後付い

て歩いてるわよ。

そんなに何度も振り返るんだったら、笹本からアタシを救出してよ。

……バカシンジ。

アタシたちのグループが選んだテーマは『数多く点在する神社は地域住民の生活にどのように係わっているのかについて』だ。海岸線に点在する祠と山側にある神社は、地域住民の生活に密接に係わっているのだという。それを調べるために、神主さんから話を聞いて回っているのだ。

昨日は海岸線に多く点在する祠等を見て回ったので、今日は山側の神社を回ることになっていた。

しかし、海風が通り抜ける海岸線と違い、今日のコースは、時が止まってしまったのではないかと思えるほどに、空気の流れが感じられなかった。

空から照りつける太陽が、さらにアスファルトに反射して、熱い空気となって身体に纏わり付く。

そんな中でも、間宮さんはシンジにべったりで。見てるこっちが暑苦しいっての。

でもなんとか午前中を乗りきれそうだ。宿舎に帰ったら、すぐにも出かけよう。新しい水着を着て、海へ飛び込んで。

それだけを楽しみに、この最悪な環境と状況をなんとか乗り切ろうと考えていた。

それなのに。

あと一箇所で調査終了というところまできて、アタシは自分の身体に違和感を覚えた。

なんか頭痛くなってきた。暑い中、変なことばかり考え過ぎたかしら？

陽炎……？

前を歩いているシンジの後姿が歪んで見える。これだけ暑いんだもの。陽炎が立ってもおかしくないわよね。

でもね、さつきからなんだか足元がふわふわするの。まるでスポンジの上を歩いているような。

ほら、視界もさつきより暗くなって。足を踏み出すと、やわらかいスポンジに足をとられるみたいになって。その上シンジの姿が見えなくなつて……

えっ……？

やだ、これ……ちょっとおかしい……
ただの陽炎じゃ……

ない。

……あれ……？

第3話

目を開けたアタシの目に最初に飛び込んできたのは、他でもない。アタシのいちばんの親友であるヒカリの姿であった。

「あつ、アスカ、気が付いた？ どう？ どこがおかしなところない？」

「……ヒカリ」

ヒカリの顔が、アタシを上から覗き込む。

「もう、びつくりしちゃった。途中でアスカたちを見かけたから声をかけようと思って近づいたら、突然フラツと倒れるんだもの」

アタシ、倒れたんだ……

「さつき保健の先生が見に来てくれたけど、軽い熱中症だそうよ。それに疲労も重なって、眩暈を起こしたんでしょうって。昨夜の寝不足がいけなかったのかもしれないわね。ごめんなさいね。気付いてあげられなくて……」

「ヒカリのせいじゃないわ。こんなに暑いんだもの。眩暈くらい起こすわよ」

「でも、たいしたことなくて良かったあ。あつ、これ、少しずつでいいから飲んでね」

そういつてヒカリはスポーツドリンクを差し出した。

「ありがとう」

自分の頭で考えるよりも早く、アタシはそれを口に流し込んでいた。この瞬間を、アタシの身体は待ちわびていたに違いない。冷たすぎず温すぎず、のどに流れる傍から身体に染みて行くような、そんな心地よさがアタシを襲う。

冷房の利いたこの部屋でひと眠りしたからだろうか。さっき外を歩いているときに感じたような、ふわふわした感覚はすっかり消えていた。

「ヒカリがここまで連れてきてくれたの？」

ようやくアタシは当たり前の疑問を口にした。

「いやだ、アスカったら。私じゃアスカを運ぶなんて無理だわ」

「じゃあ、誰が？」

「アスカのグループには適任者がいるじゃない」

「適任者……？」

そっか。笹本か。身体大きいもんね。笹本以外にアタシを運べるような人間、あの場にはいなかったものね。

不本意だけど、あとで礼を言っとくか。あまり不要な借りは作りたくないし。

「ああ、笹本ね」

そう呟いたアタシに、ヒカリが心底驚いた顔を向けて寄越した。

「アスカ、何言ってるのよ。他にいるでしょ？ 適任者が」

「他につて言ったつて、笹本以外にアタシを運べるような人……」

「体格の問題を言ってるんじゃないわ。アスカのことを大切に思ってる人がいるでしょ、つてこと」

体格の問題じゃないつて言ったつて、実際問題として、この暑さの中アタシをここまで運んで来るとそれは簡単なことじゃない。

アタシのことを大切に思ってくれてる人？ アタシを大切に思ってくれている人が、ここまでアタシを運んできてくれたつてこと？ それつて……たぶん……たぶんそれは、シンジのことを言ってるのよね？

シンジは昔っからそうなのよ。アタシが怪我をしたり、病気になったりすると、自分のことよりもずっと必死になって心配して。

でもだからって、シンジがアタシのことをここまで運ぶなんて、そんなことできるわけないわよ。この暑さの中、あのシンジがひとりでアタシをここまで運んでくるなんて。

でも、もし本当にそうなんだとしたら……
そうなんだとしたら？

「……シンジ？」

「やっとわかったか。本当に世話がやけるんだから」

ヒカリはそう言つてニツコリと微笑んだ。

「碇君、すごく格好良かったのよ」

「何が？」

「倒れているアス力を碇君が抱きかかえようとしたらね、笹本君が碇君に言つたの。『こんなチャンスめつたにないから俺に抱かせるよ』って。そうしたら、碇君すごく怒つてね。『触るな！ アス力に触るな！』って。

碇君があんな風に怒るの初めて見たから驚いちゃった」

シンジが？ アス力に触るなって？

「それで碇君がアス力を負ぶって、ここまで連れてきてくれたってわけ。あとでちゃんとお礼言わなくちゃだめよ、アス力」

アタシのこと、他人に触らせたくなかったから？

「無理しちゃって、バカね」

「またそんな憎まれ口利いて。いい？ 碇君にちゃんとお礼言つたよ」

アタシのこと守ってくれたの……？

「わかつてるわよ」

アタシは小さく頷いた。

「ところで、シンジは今どこにいるの？」

「たぶん海にいると思うわ」

「海？ アタシも行く！！」

そう行つて布団から抜け出そうとしたアタシを、ヒカリが静止する。

「アスカはダメよ。残念だけど、もう少しここで大人しくしてなくちゃダメ」

「でも……」

「本当は碇君、アスカが目覚めますまでずっと傍にいるつもりだったのよ。でも女子の部屋に碇君がずっといる訳にもいかないし。みんなにもしつこく海に誘われて、それで」

「せつかく水着買ったのに……」

ポツリと言つたひとことを、ヒカリは聞き逃さなかった。

「そうね。せつかくの水着を碇君に見せられなくて残念かもしれないけど、今日は諦めてちょうだい、アスカ」

「べ、別にシンジに見せたいわけじゃないわよつ。ただせつかく水着買ったのに使わないんじゃないし、せつかく海に来たのに泳がないなんてもったいないし、それに……」

「あら、今度碇君と二人で海に行ったらいいんじゃない？」

「だ、だから、シンジのために買ったんじゃないって言ってるでしょ！―！」

ヒカリったらニヤニヤして！

他人事だと思って勝手なこと言ってくれるじゃない。他人事だと思っ……

「ねえ、ヒカリは海に行かなくていいの？ ヒカリだって楽しみにしてたでしょ？ 海で泳ぐの」

「いいのよ、私は。アスカをおいていくなんてできないし、それに私はアスカと海へ行きたかったんだもの。アスカがいらないんじゃないわ」

「ごめんね」

申し訳なくなっと思わず俯いたアタシに向かってヒカリが微笑んだ。

「私が勝手にしたこと。アスカは気にしないで」

「本当に、ごめんね……そうだ！ 今度みんなで海に行けばいいのよ。鈴原も誘って」

「す、鈴原も？」

「そ。何か困ることでもある？」

「そんな……そんなことはないけど……」

「じゃ、決まりね」

アタシの勢いに押されてか、ヒカリは真っ赤になって小さく頷いた。さっきのようなお母さんのような態度はもはや影も形もなく。もう、かわいいんだから。

これはアタシをからかったことへの仕返し。そして、ずっとアタシの傍にいてくれたことへの恩返し。

それでも感謝してるのよ。……ありがとう。

第4話

「こっちの席の人から、一枚ずつくじを引いてください。こっちの箱が男子で、こっちの箱が女子用です」

夕食が終わったあとの学習室は、今回の臨海学校でいちばんの盛り上がりを見せていた。これから、みんなが心待ちにしていた肝試し大会が行われるのだ。

コースは臨海学校の敷地内を一周。あらかじめ肝試し大会委員なるものが設立されていて、詳細なコースやお化けの役割等々はすでに決められている。

学級委員であるヒカリの合図と共に、くじ引きが開始された。誰かの手によってクジが一枚ずつ開かれていくたびに、あちらこちらで悲鳴やため息やら、もしくは歓声等が大きくなっていく。

いよいよ、アタシの番がやってきた。

別にアタシは誰が相手だって構わないのよ。でも、せっかくヒカリがクジに手心を加えたって言うし。それを無駄にしちゃ悪いし。アタシはそういうの興味ないんだけど、でもヒカリのためにね。そう。ヒカリのために。

箱に手を差し入れると、一枚の紙を掴んで引き抜いた。

部屋を見回すと、クジを手に間宮さんと向かい合ってるシンジの姿が目に入った。

「碇君と一緒に!? いやあん、嘘みたゝい。碇君、よろしくね!」

「こちらこそ、よろしく」

なによつ、シンジったらあんなに赤くなっちゃって。こんなの間宮さんの思うつぼじゃない。なんでシンジの相手が間宮さんのよ。

こつち向け。こつち向け。バカシンジ、こつち向け! そのバカ面見て笑ってやるんだから。

相手がちよつと自分に気があるからって、そんなにモジモジしちゃって。本当にバツカみたい。アタシにはどうでもいいことだけど、シンジがあんまり浮かれているからいけないのよ。だから少しくらい笑わせなさいよ。あとで精一杯驚かせてあげるから。

そんな言い掛かりにも似た念を送っている私に、至極申し訳なさそうな顔をしたヒカリが近づいてきた。

「ごめんね、アスカ! クジ引きに細工したはずだったんだけど、どつかで手違いがあつたみたいで、アスカが引くはずだったクジを間宮さんが引いちゃったみたいで」

いいわよ、別に。アタシはシンジとペアになりたかったわけじゃないもの。ただ、昼間のお礼を言うきっかけになるかなって思っただけで、別にそれ以上のことは期待してなかったし。全然いいのよ。気にしないで。

「で、アタシ、お化けなんでしょ?」

「まさかアスカがお化けを引くなんて！ 本当にごめんね」

「いいのよ、別に。ところで、ヒカリの相手は誰になったの？」

「それがね……」

「ええっ、鈴原！？ やったじゃない！！」

「あ、あの、これは別に私が引いたわけじゃなくて、えっと私のクジと交換して欲しいって言う人がいて、それでたまたまそうなっただけで……」

「きゃあ、すっごく楽しみになってきたわ。アタシ、思いつきり驚かすから、派手に怖がってよね。なんなら鈴原にしがみついちやったりしてさ」

「そ、そんな、アスカ、何言って……」

「で、アタシのお化け仲間是谁なの？」

「あっ、それなんだけど……」

ヒカリの言葉に絶句してるアタシを、シンジが振り向いた。もちろん爽やかな笑顔のおまけつき。

なんてタイミング悪いやつ。

でも、アタシの念もたいしたものね。ちゃんと通じてる。ほら、笑ってやるわよ。

そう思っただけで、シンジの呑気な笑顔を見たらそれさえも出来なくて、アタシはフンツとそっぽを向いた。

なんか、面白くない。

そういえば、昼間のお礼、まだ言ってなかったな。

そんなことを思ったアタシの背中には、シンジに笑顔を返さなかったことに、少しの後悔の色が浮かんでたかもしれない。誰にも気付かれてないといいんだけど。

そんな想いを振り払うように、アタシはお化けの準備のために学習室を後にした。

「もう、信じらんない!!」

怒りというか、嘆きというか、ひとり興奮冷めやらぬアタシは、花壇の植え込みに身を潜めて呟いた。

お化けのクジを引き当てただけじゃなくて、その相手がよりによって笹本だなんて。アタシのクジ運の悪さにも程がある。こんな暗闇で笹本と二人つきりだなんて、何されるかわかったもんじゃないわ。

一人で息巻いていると、遠くから肝試し大会スタートを知らせる笛の音が聞こえた。

ちょっと、笹本ったら何やってんのよ。もう始まっちゃうのに。アタシを待たせるなんて、いい度胸じゃない。まあこんなお化けの

仕事、ひとりで十分だけど。

アタシの足元には氷水の入ったバケツと、園芸用のノズルの長い霧吹き。この霧吹きを使い花壇の前を通る人の足を狙って、冷たい水を一吹きするのだ。

この程度で驚く人、いるのかしら？

笹本が到着するより早く、一組目がやって来る声が聞こえた。「きゃーっ」とか「わあああっ」とか、そんな声が近づいて来る。こんな子供だましの肝試しで、真剣に驚くやつがいるのね。

そんな変な感心をしながら、アタシも前のお化けたちに倣って、彼らを驚かせることに尽力する。

花壇の隙間からノズルを伸ばし、足をめがけて冷水をひと吹き。

「おおおっつー!!」

「きゃあっ!!」

おっ。これは、意外と……

アタシは彼らの悲鳴に軽い快感を覚え、これ以降はかなり真剣にお化けを演出した。二組目も三組目も、面白いように悲鳴を上げる。手の込んだものよりも、こういう単純なものの方が恐怖を煽るのかも知れない。

それにしても笹本のやつ、何やってんのよ。後で覚えときなさいよ。

ふと冷静になってみれば、辺りは真っ暗。居る場所がバレてしまっただけで困るから、もちろん明かりはつけられない。お化けに驚かさ

れるよりも、ここでこうしてお化けをしている方がずっと怖いのではないかと思えてくる。

いくらなんでも女一人でここに隠れてるのって、危険よね。敷地内とは言え、か弱いアタシが一人でこんなところに居るのって……
ああ、もう笹本でも何でもいいから、早く来い！ 一人で居るよりは、きつとマシ。

そのときだった。背後からガサツつと葉を揺らす物音が聞こえた。

アタシはビクツとして振り向くと、目を凝らす。

黒い影が近づいてくる。ささもと……？

もつと小さな黒い影。笹本じゃない。やだ、何？ 誰？

アタシは身を硬くした。

「遅くなつてごめん、アスカ」

ん？ この声……

「シンジ！？」

「ごめんね、アスカ。一人で怖くなかった？」

シンジはそう言つて、驚いて大きく目を見開いているアタシの隣りにしゃがみ込んだ。

「な、何でシンジがここにいるわけ！？ シンジは間宮さんと一緒に組だつて……」

「そうなんだけど、僕、間宮さんてなんか苦手だし、それに……」

「それに？」

「アスカの相手が笹本だって聞いて、それってちょっと嫌だなんて思ってた」

「どうしてアタシの相手が笹本だと嫌なの？」

「だってアスカ、笹本が傍にいと迷惑そうな顔してたし、だから嫌なのかなって」

……なんだ。気付いてたんだ。

「シッ」

アタシは自分の指を口元に当てたまま、もう一方の手で冷水を噴射した。

「あつ、ごめん。お化けやらないとね。ここを通る人にこれを吹きかければいいの？」

シンジはなんだかやけに楽しそうな顔をして、霧吹きを構える。

「なんだかドキドキするね。こういうの。驚かされるよりも、驚かす方が楽しいかも」

まったくもう。子供みたいな顔しちゃって。アタシの口から、思わずクスクスと笑い声が漏れた。

「ん？ 何？」

「べつつに」

本当に、バカなんだから。
……バカシンジ。

第5話

「それにしても、よく笹本が代わってくれたわね？」

「あ、それは……ちょっとね……」

「ちょっとって、何？」

「うん。ちょっとね」

「ふん」

アタシは霧吹きを正面に構えたまま、小さな声で呟く。

「ありがとう」

「何が？」

「倒れたアタシを運んでくれたの、アンタなんですよ」

「あ、う、うん……」

シンジは少し慌てて返事をして、そして急にアタシから目を逸らした。

ちょ、ちょっと何でそんなに照れてんのよ。こっちが恥ずかしくなるじゃないっ。

「とにかく、ありがとう。アタシ、重かったでしょ？ 無理しないで

笹本にでも運ばせれば良かったのに」

「ありがとう」だけにしておけばいいのに、余計な台詞が口を吐いて出た。

これはアタシの照れ隠し。アタシの悪い癖。

そんなアタシの言葉に、過剰なまでの反応を見せたシンジに驚いた。

「そんなことできないよ！」

シンジ……？

「な、なんで怒るのよ？」

「アスカがおかしなことからだよ」

「何よ。ほんの冗談じゃない」

そう。「冗談。そんなの本心じゃないもの。アタシの悪いくせで、思わず口から出てしまっただけで。

本当はシンジにたくさん感謝してる。だから一緒に笑い飛ばして欲しかったのに。

「冗談でもそんなこと言うなよ」

いつになく、シンジの声はアタシの胸に突き刺さった。

「だから、なんでそんなに怒るのよ……」

アタシは思わず霧吹きを胸に抱えて。お化けだっことを忘れちゃうくらい、それはアタシに衝撃を及ぼした。

「嫌なんだよ……」

「嫌って何が？」

「誰にもアスカに触って欲しくないんだ」

「何言って……」

「だって、嫌なんだよ。アスカが倒れたとき、笹本がアスカを抱き上げようとしたのを見て、それだけは絶対に嫌だと思ったんだ。僕以外の誰かがアスカに触れるなんて、そんなの絶対に嫌だって」

アンタ、何言ってるかわかってるの？ それはどういう意味か、わかって言ってるの？

「何で、嫌なの……？」

「なんでだろう……今までそんなこと考えたことなかったけど、でもあの時、アスカに伸ばされた笹本の手を見たとき、僕以外の男がアスカに触れるなんて、絶対に嫌だと思った。アスカに触れていいのは、僕だけだって……」

アタシの聞き違いじゃない。隣りにしゃがんでいるシンジはアタシのことをじっと見つめて、確かにそう言った。

それを聞いたアタシは、すごく驚いて、息が詰まりそうになって。いや、そうじゃない。すごく嬉しくて、胸が苦しくなったんだ。

だって、アタシも思ったんだもの。シンジがアタシを運んできてくれたってヒカリに聞いたとき、アタシも確かに思ったんだもの。

アタシを運んでくれたのがシンジで良かった、って。シンジに運んで欲しかった、って。

アタシたちのココロのベクトルは、同じ方を向いてたのね。ずっと。

アタシは震える声を隠して、自分の言葉のその意味をわからないでいるバカシンジに向かって呟いた。

「バカね。それって、好きってことじゃない」

アタシの言葉にシンジは心底驚いた顔をして、それから俯いて一人ほくそえんだ。

「そっか。これが好きってことなのか」

「そうよ、それが好きってことなのよ」

自然と笑みがこぼれる。アタシも、シンジも。きっと同じ気持ちだから。

お互いに小さく微笑み合ったとき、思いがけずシンジが苦痛の声を上げた。

「痛っ……」

「どうしたの？」

声と同時に右手で口元を押さえたシンジの顔を覗きこむ。

「あつ、ちよつとね」

「ちよつと見せなさいよ」

「大丈夫だってば……」

「ほらっ、見せて」

アタシはシンジの手を無理矢理どかすと、顔を近づけて目を凝らした。アタシの目はすっかり暗闇に慣れていたので、これくらい近づけば、明かりがなくてもなんとか見える。

口元が、なんか少し黒ずんで……

「アンタ、唇の端切れてるじゃないっ」

「あ、うん……」

「『あ、うん』で、どこで切ったの？ 転んだの？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

「じゃあどついうわけよ」

「たいしたことないから大丈夫だよ」

「大丈夫じゃないわよ。こんなところ怪我するなんて、子供じゃあるまいし。何があったの？ 正直に白状なさい」

「だから、大丈夫だってば」

「いいから話なさい!!」

「わ、わかったよ……でも誰にも言わないでよ」

「いいわ。約束する」

「実は……」

「はあ？ アンタ、バカじゃないの？」

「だから言いたくなかったのに……」

シンジの話を要約するところだ。

笹本にクジを交換してくれと頼んだのだけど、案の定、拒否。しつこく食い下がるシンジに、笹本が一つの条件を出した。クジを交換してやる代わりに一度殴らせろ、と。

「で、アンタは『はいそうですか』と顔を差し出したってわけ？」

「だって、そうしないと代わってくれないって言っから……」

「ほら、もう一度見せて」

「ええ、もういいよお」

「いいから見せなさい！」

アタシは顔を近づけてその傷をもう一度眺める。

アタシのために、負った傷。本当は喜んじやいけないんだけど、でも、嬉しい。これがシンジの意志の証なんだもの。嬉しくないわけがない。

手を伸ばして、その傷にそっと触れる。

痛かったくせに、やせ我慢しちゃって。

でも、そういうの、嫌いじゃないわよ。

自分でも驚いたんだけど、そんなことするつもりなかったんだけど、アタシの唇は、そっとその傷に重ねられていた。

「あ、アスカ……」

呆然としたシンジの声に、ハッと我に返ると、アタシは慌てて飛び退いた。

「あ、あ……こ、これは……その……お、おまじないっていうか……そう、あの……怪我が早く治りますようにっていうおまじない」

「あ……りがと」

なんて話を続けていいのかわからなくて、どんな顔をしたらいのかわからなくて、アタシは霧吹きを胸に抱え込んだ。

お化けだつてことをすっかり忘れちゃってたから、霧吹きの中の水はまだ沢山残っていて、容器の周りは汗をかいて、その滴がアタシの服を濡らした。

そういえば、アタシ、お化けだつたんだっけ。何組目まで終わったんだろう。

「ねえ、知ってる？」

膨張しきつた頭を冷やそうと必死になっているアタシに、シンジが尋ねた。

「この肝試し大会でカップルがたくさん生まれるって話」

「知ってるけど？」

「あれって、みんなは肝試しと一緒に回った人同士が結ばれるって思ってるみたいだけど、本当は違うんだよ」

「どういうこと？」

アタシは思わずシンジを振り向く。

「一緒に回った人が結ばれるんじゃないかって、お化けと一緒にやった人同士が結ばれるって話なんだ」

シンジはまるで見てきたかのように、自信のある口調で話を続けた。

「なんでシンジにそんなことわかるの？」

「だって、知ってるから」

「知ってるって、何を？」

「この肝試し大会で結ばれた人たちを、だよ」

「それは……？」

遠くから笛の音が聞こえた。肝試し大会終了の合図。

「あつ、終わりの合図。お化けの仕事、ちゃんとやらないで終わっちゃったね」

シンジはアタシの質問に答える前に、小さく笑いながら立ち上がると、

「さ、戻ろう」

そう言っアタシに向かって手を伸ばした。

でもアタシはなぜか手を伸ばせない。アタシのココロはシンジに向かってるのに、おかしいわね。

そんなアタシに、シンジは尚も声をかけた。

「ほら、アスカ」

優しいシンジのその声に、思わずシンジの顔を見上げる。声だけ

じやなく、その笑顔もとても優しくて。アタシは差し出されたシンジの手を少し眺めて、そして、シンジの手のひらに自分の手のひらをそっと重ねた。

シンジは気付いてたかしら？

「ほら」

そう言っあの時あなたが差し伸べてくれたその手は、アタシの幸せそのものだったのよ。

アタシたちもいつまでも語り継がれる二人でいたいわね。
シンジのお父さんとお母さんのように。ね。

第5話（後書き）

最後までお読みくださって、ありがとうございます。拙い作品ですが、少しでも幸せな気持ちになっていただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8115v/>

ココロのゆくえ

2011年10月9日13時49分発行